

若手大工育成プロジェクト 第二回大文賞贈呈式

平成26年10月11日(土)

職藝学院 名匠情報センター大研修室

主催 学校法人 富山国際職藝学園

共催 工学院大学 建築学部

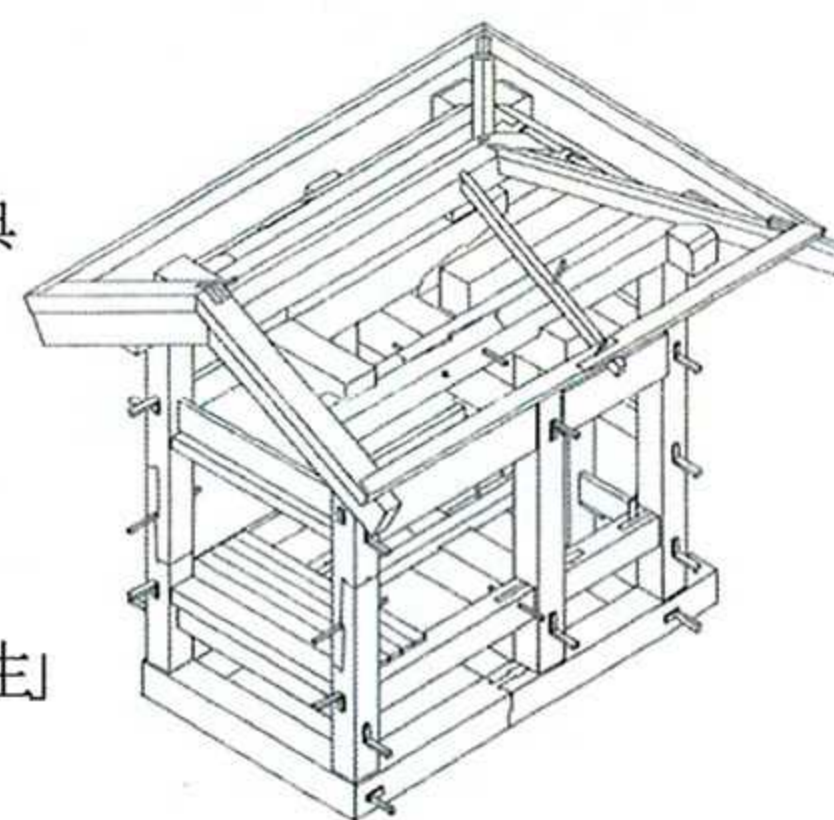
後援

富山県、富山市、高岡市、富山大学芸術文化学部、富山国際大学

一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本建築士会連合会

全国建設労働組合総連合(全建総連)、一般社団法人全国中小建築工事業団体連合会(全建連)
一般社団法人JBN、株式会社北日本新聞社、北日本放送株式会社、富山テレビ放送株式会社

- 挨拶 ……………13:30～13:40
学校法人富山国際職藝学園理事長 稲葉 實
- 選考経過 ……………13:40～13:50
選考委員長・日本建築士会連合会会長 三井所清典
- 贈呈式 ……………13:50～14:00
団体部門 個人部門 特別賞
- 記念講演 ……………14:00～15:00
ベトナム社会主義共和国 グエン・トゥオン・ヒー氏
「ダイフミ先生の元で学んだことと、わたしの文化財保存人生」
- 受賞者との交流 ……………15:00～15:40



だいふみ

大文賞について

わが国固有の木造建築の伝統技術・技能を後世に引き継ぎ、木造建築づくりを支え、未来へつなぐ若い担い手を育成する重要性が叫ばれて久しいにもかかわらず、それを実質的に支援する活動は稀有でありました。

2011年3月11日の東日本大震災を境に、全世界から日本の伝統的“結い”の国民性が見直され評価されました。時あたかも、西の西岡常一、東の田中文男と言われた田中文男棟梁こと“大文さん”が亡くなり、有志による“偲ぶ会”には数百人の方々が日本列島津々浦々から東京に参集され、田中棟梁の足跡の偉大さを偲び合いました。生前、棟梁の警咳に触れ、元気をもらった方々の共感の場となっていました。このエネルギーをぜひ次世代につなげないか！ということから「若手大工育成プロジェクト」がスタートしました。

職藝学院初代オーバーマイスター田中文男棟梁は、生前様々な機会を捉えて若手建築技術者・技能者の育成に大いなる熱意で取り組み貢献されてきました。当学校法人はその姿勢と意思を継承し、偲ぶ会有志のご指導とご協力を得て、大工育成に真摯に取り組んでいる機関や将来性のある若手大工を顕彰する「若手大工育成プロジェクト『大文賞』」事業の第一回を平成25年に行いました。本年、第二回の募集を行い今日ここに各賞の贈呈式を行います。

若手大工育成プロジェクトの経過

●「田中文男さんを偲ぶ会」および「若手大工育成プロジェクト支援講演会」

2010年10月11日「田中文男さんを偲ぶ会」が開かれ、それを受けて「若手大工育成プロジェクト支援講演会」を開催

大武健一郎氏（元国税庁長官）「日本の危機 東日本大震災をのりこえて」

三井所清典氏（芝浦工業大学名誉教授）「地域の復元力となる木造の住まいと建築」

斉藤英俊氏（京都女子大学教授）「桂離宮に見られる構法・技法」

宮澤智士氏（長岡造形大学名誉教授）「古民家の魅力を探る—土肥家住宅の編年研究」

橘慶一郎氏（衆議院議員・前富山県高岡市長）「災害を乗り越えて—高岡の文化財の形成史」

●第一回大文賞

2012年8月9日 若手大工育成プロジェクト事業計画を発表

記念講演：後藤治氏（工学院大学教授）「東日本大震災の文化財被害から見える職人の必要性」

2013年8月9日 募集・選考を経て第一回大文賞発表

記念講演：宮沢智士氏（長岡造形大学名誉教授）「日本民家研究史の試論」、

2013年10月12日 贈呈式

記念講演：ブータン王国キンレイ・ウォンチュック氏「ブータンの伝統建築・大工技術と文化財の修復」

●第二回大文賞

2014年2月1日～5月31日 ・第二回大文賞 募集

2014年7月11日 ・・・・第二回大文賞 選考委員会開催

2014年8月9日 ・・・・第二回大文賞 発表（会場：工学院大学新宿校舎）

記念講演：安藤邦廣氏（筑波大学名誉教授・里山建築研究所主宰）

「板倉構法による震災復興の取り組み

田中文男の遺志を受け継ぐ者の一人として」

2014年10月11日 ・・・・第二回大文賞 贈呈式（会場：職藝学院）

職藝学院 初代オーバーマイスター 田中文男棟梁のことば



宮大工棟梁。1932年茨城県生まれ、戦後まもなく宮大工棟梁に弟子入りして腕を磨き、その後2010年8月9日に逝去されるまで、(株)真木建設・(有)真木の社長として文化財建造物の修理・復元や社寺・住宅などあらゆる建築を手がけ、幅広い知識と理論重視で学者棟梁と呼ばれる一方、大工を始めとする多くの木造建築技術の後継者を育てられた。

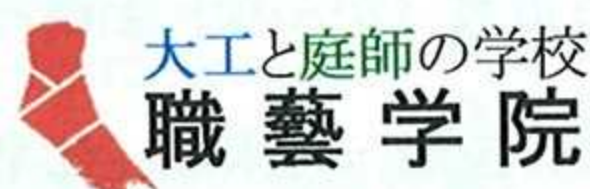
職藝学院設立発起人の一人で、開校時より初代オーバーマイスターを務められる。

（前略）技術者育成の本質とその成否は、制度の是非ではなく、実際に修得を志す人の自覚に大きく左右される。技術の修得は、これまでの学校教育のように、教えられたことを覚えるだけでは到達できない。自主的に馴れて覚え、習って覚えることが重要である。

私は徒弟時代に、師匠や先輩方より次のような教訓を頂いて成長してきた。その内容は現在でも普遍性を持ち貴重である。「仕事は習うより馴れろ」「仕事に練習はない」「自分でよく考えてみて、判らなければ教えてもらおう」「職人は一生勉強だ」「くらしは下を見て、仕事は上を見て毎日励め」、これらの教訓の帰するところは、「職人は貧乏でも世の中のためになる人宝になれ」に集約できる。

（中略）私も「職人は貧乏でも」は良くないと思っている。しかし、貧乏の内容をどの尺度で測るかによるだろう。たしかに私を例にとれば、物質的豊かさにはほど遠いのは否めない。けれども、日常の仕事のなかで、新しい問題に出会い、その解決に苦勞をして出来上がったときの喜びが、ひとしおであるのは何物にも勝る。私はそれを人生の生き甲斐としてきた。

※「大文賞」については職藝学院ホームページ参照：home>職藝ネットワーク>若手大工育成プロジェクト



大工と庭師の学校
職藝学院

〒930-1298 富山県富山市東黒牧 298（問合せ 9:00～17:00 土曜・日曜・祭日を除く）

E-mail info@shokugei.ac.jp URL www.shokugei.ac.jp

TEL (076) 483-8228 FAX (076) 483-8222



第二回大文賞受賞者

●団体部門

『大文賞』大工育成団体奨励賞 長野県立松本技術専門校 建築科



- 昭和 21 年(1946)長野県松本建築職業補導所として開設。昭和 53 年(1978)現校名となるが、建築科の設置は昭和 22 年と古い。職業能力開発促進法に基づく長野県が設置運営する職業能力開発施設である。
- 「建築科」は定員 20 名、訓練期間 2 年間で、直近 5 年間の修了生は平均 10 名で、大半が自家就業を含む工務店への就職である。
- 訓練は学科と実技計 2,800 時間で、和風木造住宅の在来工法における知識と技術を基礎から学び、模擬家屋の建築、企業実習も取り入れる。
- 選考委員会からは、この受賞を機に若手大工育成に向けて更なる努力と熱意をもって取り組んでいただきたいとの要望がある。

●個人部門

『大文賞』大工奨励賞 石飛 司 いしとび つかさ



- 1983 年島根県生まれ、島根県出雲市在住。繁栄建設(出雲市)勤務、大工職歴 14 年。出雲工業高校卒業、1 級建築大工技能士・二級建築士など。
- [講評] 実技審査では、継手や仕口をひとつずつ確認しながら、継手仕口模型を組立てた。部材を整理することなく、見本模型と見比べ、必要な部材をさがしながら組立てていた。伝統構法でよく使われる長ホゾの経験はあまりないようだった。質問に対する答えは的確で、特にトラブル対応に対する質疑応答では非常に評価が高かった。日頃から手刻みの物件を中心にこなしていて、加工には特段に思い入れが強そうである。手間を掛けることをいとわず、また、そのような技術を後世に伝えていきたいとの意気込みが感じられた。近い将来、棟梁にふさわしい人材に成長するだろうという期待は持てるが、さらなる精進が求められるということで、奨励賞とした。

『大文賞』大工奨励賞 山下 裕 やました ゆたか



- 1978 年富山県生まれ、富山県氷見市在住。山下建築工業(富山県氷見市)勤務、大工職歴 15 年。職藝学院卒業、2 級建築施工管理技士など。
- [講評] 実技審査では、一つ一つの継手や仕口をよく観察しながら組立てていこうという姿勢がうかがわれた。長ホゾのある伝統構法の仕事の経験の少なさがうかがわれた。カンナは使い込まれ、よく手入れがされているようであった。共通質問には少しもの足りなさがあったが、受け答えでは自分の考え方や方向性がしっかりしていた。日頃は工期や予算に応じて手刻みとプレカットを使い分けている。大工が社会で果たすべき役割については、「顧客にしっかり説明し、長持ちのできる住まいを造っていくこと」と答え、大工職としての誇りと自信が垣間見えた。しかし、まだまだ精進してもらいたい点もあり、奨励賞とした。

●特別賞

『大文賞』特別賞 ベトナム社会主義共和国 グエン・トゥオン・ヒー氏



真木で研修中の
グエン・トゥオン・ヒー氏

1956 年 トゥアティエンフエ省フエ市生まれ
1979 年 フエ高等美術学校卒業
1979～1996 年 クアンナムダナン省文化通信局博物館勤務
1997～2000 年 クアンナム省文化体育観光局博物館勤務
2000～2011 年 クアンナム省文化体育観光局遺産遺跡保存センター勤務
2011 年 クアンナム省文化体育観光局を退職
現在嘱託職員としてミーソン遺跡で修復事業に参画

グエン・トゥオン・ヒー氏は、ベトナム国クアンナム省文化財局勤務中の 1995 年文化財の保存修復等の研修のために来日、奈良国立文化財研究所で考古学的発掘の研修の後、田中文男棟梁の下で六所神社本殿修復工事(千葉県大多喜町)、観音寺仁王門修理工事(茨城県牛久市)などの実際の現場で文化財建造物の修復技術についての研修を受けた。帰国後はベトナム各地の建築遺跡の修復や調査に携わり、文化財局引退後も嘱託職員として各地で活躍している。もともと建築技術者ではなかったが、日本での研修、特に田中棟梁のもとで研修を受けたことで、文化財建築物の調査や修復の技術者として活躍されていることを評価し、特別賞を贈呈する。

選考経過と講評

選考委員会	委員長	三井所清典	日本建築士会連合会会長、芝浦工業大学名誉教授
	委員	岩瀬 繁	岩瀬建築有限会社代表取締役社長
		後藤 治	工学院大学教授
	島崎 英雄	大工棟梁、職藝学院オーバーマイスター	
	山岡 義典	市民社会創造ファンド運営委員長、日本 NPO センター顧問	
	山本 博一	東京大学大学院教授	
	稲葉 實	学校法人富山国際職藝学園理事長	

●総評

「大文賞」は田中文男棟梁の遺志を受け、若手大工を育成する目的で創設されたものである。今回は第二回目で、その趣旨にかなった結果になったものと考えている。

選考は、7月11日に行われた。団体部門は提出された調書をもとに、応募された職業訓練校での大工育成のあり方及び田中棟梁考案の継手仕口模型の活用法について検討を行い、選考委員の話合いによって決定した。

個人部門は事前に書類選考を行い、最終選考の面接出席者を2名に絞り込んだ。書類選考では、募集要項に示された要件を満足しているかどうか、大工職能に対する考え方がしっかりしているかどうか、を基準とした。選考委員会では、応募書類に記載された実績だけでなく、面接と実技考査を行い、「大文賞」にふさわしい人材の選考に取り組んだ。面接は共通の質問と簡易な実技考査の2本立てで行った。また実技考査によって、継手・仕口についての知識や段取り能力などを審査した。

第一回では特別賞をブータンのクレイ・ウォンチュク氏に贈呈したが、今回は特別賞を設けるかどうか検討し、今回も設けることとなった。田中棟梁のもとでは、多数の外国の方が研修されたが、その中から選出することにした。候補者の名前が何人か上げられたが、今回は、ベトナムのグエン・トゥオン・ヒー氏に贈呈することになった。

●A 団体部門

今回の応募は1団体のみであった。応募者は長野県が設置運営する職業能力開発施設で、2年制の訓練科（普通課程）として建築科などが設置されている。建築科では、木造住宅の在来工法における施工技術を基礎から学び、建築大工として必要な基礎的知識、技能を養うことができる。また、技能五輪競技大会への参加を通じ、技能習得に力を入れている。

継手・仕口模型は、工作実習だけでなく、規矩術や構造概論、工作法など基礎から専門的なものまで多くの学科で活用することを考えている。模型を活用することで、木造住宅に使用される継手や仕口についての理解をより深めることができる。以上のような活用を考えている。

この団体が実施していることは素晴らしいのだが、「大文賞」の趣旨には若干かなっていない面もあるように思われた。田中棟梁とまで行かなくとも、若手大工育成には、指導者の多大なる熱い思いが必要であり、それが若者たちの心に響くものである。それが伝統的な技術・技能を伝えていく力にもなりうるのである。そういう意味では、残念ながら、今回は優秀賞には該当しないという結論となった。松本技術専門校におかれては、これを機に若手大工育成に向けてさらなる努力と熱意をもって取り組んでいただきたい。

●B 個人部門

応募要項にも記載してあるように、事前に書類選考を行った。書類選考に当り、募集要項に示された要件を満足しているかどうか、大工職能に対する考え方が応募書類に記載できているか、を基準とした。最終選考の面接出席者は2名となった。大工職能についての考えで、対社会という視点からの見方がうかがえず物足りなさを感じるとの指摘もなされた。

最終選考では2人を個別に面接し、簡単な実技考査を行い、質疑応答を行った。時間配分については、実技考査に20分、質疑応答に20分程度とした。実技考査では、手仕口模型の組立を行い、その様子を見ることとした。質疑応答では、共通の質問を4～5問行ったうえで、各委員からの質問をするという形式にした。また質疑とは別に、それぞれが持参した日頃使用している道具（かんな）を選考委員で確認した。

その結果を受けて、最終選考を行った。これまでの経験や保有する技術・技能、将来性、仕事に取り組む意欲、道具の扱い、継手仕口模型組立てにおける手順などのチェック項目をもとに2人の評価を行った。